

い距離を歩かれての検査によって、植物防疫上の品質が担保されています。



③ 気候と肥大調査

チリは、昨年と違い遅霜の被害はありませんが、植付時期の8～9月に雨が続き、地域により圃場の一部が水没しました。既に被害のあった部分（数ha）は廃棄済みで、他の品種に影響はありませんが、近年の自然の極端さは実害をもたらしています（23年オランダ産に比べれば微々たる影響ですが）。

ニュージーランドは、（春）8月～10月の気温が低く、数回のフロストがありました。バンザンテンでは圃場に複数台のヘリコプターを飛ばし上空の暖かい空気をかき混ぜて対策をしました。ラカイア地区では一時雹も降ったそうです。（写真はVZ社からの報告で、当時の様子）



訪問時、真夏の両国とも気温が低く、最低気温は10℃前後、最高気温が25℃に満たない日が多かったため、気温が低い生育前期の印象でしたが、1月後半調査時点の肥大は、地域、圃場、品種ごとにばらつきはあるものの、平均すると2017～2020年調査に比べてCHがやや遅れ気味、NZは平年並みでした。

ニュージーランドで、春に数週間ほど定植が遅かった圃場が、他より約1cm小さかったため、12～1月は摘雷後、急速に肥大している時期なのだと思いますし、今後2～3月（10週間）の天候と圃場管理がより重要な年とも言えます。